

第2部 プロジェクトを振り返って

I 平成 29 年度実践発表会 参加者アンケートの結果から

本プロジェクトでは平成 27 年度から 3 年間、研究開発校の発表を中心とした実践発表会を開催した。ここでは、平成 27 年度と 29 年度の実践発表会参加者アンケート結果の比較分析を行い、プロジェクトの成果を検証する。(回答数：平成 27 年度：170、平成 29 年度：170)

1 「アクティブ・ラーニング」への取組状況について

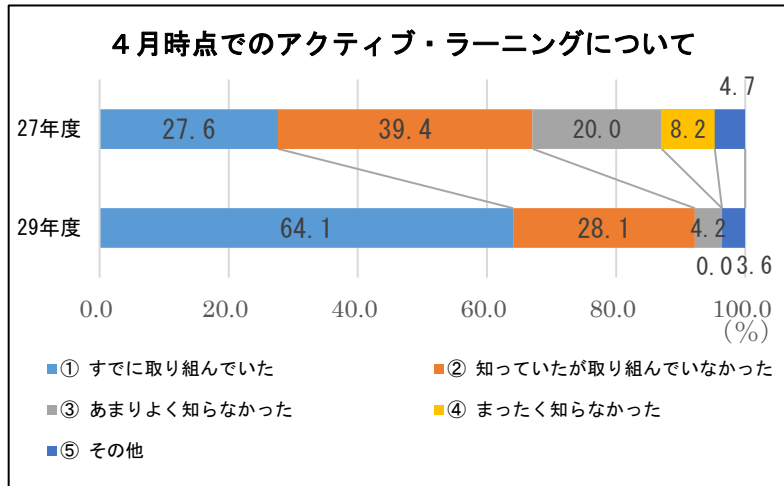


図 1

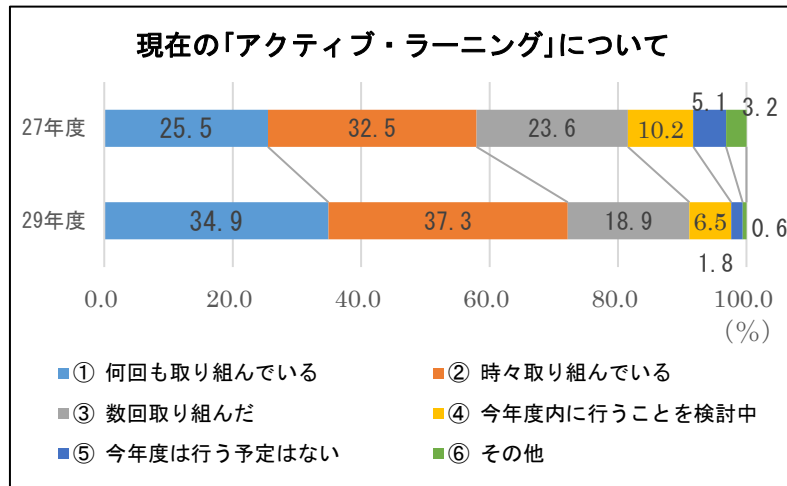
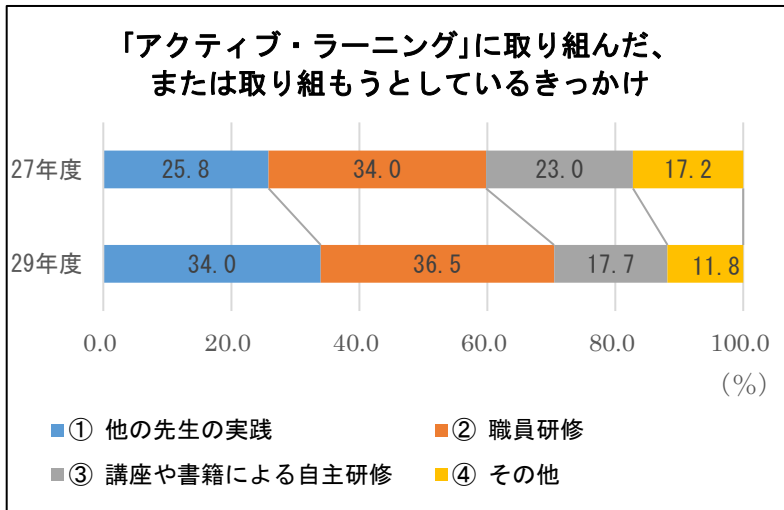


図 2

各年度当初にアクティブ・ラーニングに「すでに取り組んでいた」という回答の割合が倍増している(図 1)。また、図 2 を見ると、実践発表会開催時点で「アクティブ・ラーニング」に「何回も取り組んでいる」「時々取り組んでいる」「数回取り組んだ」という割合も増加しており、アクティブ・ラーニングの実践が確実に広まっていることがわかる。記述回答によれば、実際に取り組んだ(取り組もうとしている)授業形態としては、「班別協議・発表」「ICT 機器やプロジェクトを使用した授業」という回答が両年度ともに多く、「ジグソー法」「反転学習」がそれに続いた。また、実践発表

会での研究開発校の発表内容に触発されて、紹介された授業手法を早速自校に持ち帰ってやってみたい、という前向きなコメントが多く見られた。

図 3 からは、「アクティブ・ラーニング」に取り組んだ、または取り組もうとしているきっかけとして「他の先生の実践」の割合が増加していることがわかる。



さらに、両年度とも「職員研修」の割合が最も多いことから、校内で教員同士が学び合う土壌が作られ、それが授業改善の推進に結び付いていると推察される。実践発表会への参加を通して、校内での職員研修そのものをアクティブ・ラーニングの視点で改善する効果や必要性を感じた参加者も多かったようである。

図 3

2 アクティブ・ラーニングの実践について

「アクティブ・ラーニングに取り組んだ成果」としては、両年度ともに「生徒が主体的に学習に取り組んだ」「生徒が興味・関心をもって授業に臨んだ」「コミュニケーション能力を高めることができた」という回答が上位を占めており（表 1）、学習に取り組む生徒の姿に好ましい変化が現れたことが窺える。また、「知識の定着を図ることができた」「思考や理解を深めることができた」「自己肯定感を高めることができた」という回答が増加傾向にある。

今後は「主体的・対話的な学び」を実現させる場面を充実させながら、さらに「深い学び」につなげる取組の研究と広まりが求められる。

「アクティブ・ラーニング」に取り組んだ成果（二つまで選択）

		27年度	29年度
①	生徒が興味・関心をもって授業に臨んだ	77	77
②	生徒が主体的に学習に取り組んだ	88	94
③	自ら課題を見つけ、解決する力を身に付けさせることができた	8	9
④	思考や理解を深めることができた	42	47
⑤	知識の定着を図ることができた	14	24
⑥	コミュニケーション能力を高めることができた	45	51
⑦	自己肯定感を高めることができた	10	19
⑧	創造力を育成することができた	3	5
⑨	他者の考えを受容し、共感する力を育成することができた	18	19
⑩	その他	1	2

表 1

「実施して効果があった「アクティブ・ラーニング」の手法があれば記入してください。」という問いに対しては、以下のような回答がみられた。各学校の生徒の実態に応じた工夫と成果が挙げられている。

- ・ 授業の始めの前時の振り返りでペアトークをする。
 - ① 1分個人で自分のノートを振り返る
 - ② 1～2分、教師が出した設問の解答をペアで考える。
- ・ 生徒が板書し、説明する形態での問題演習解説によって、センター試験における得点率が過年度と比較して大きく上昇し、生徒の意欲も高まり、授業中の集中力も上がった。(数学)
- ・ センター試験の問題をグループで検討させて、グループ代表に根拠を挙げて解答解説を発表させた。能動的に活動し、理解も深まったように思う。
- ・ 人権学習で「価値観」について考える授業をした際、グループ学習を取り入れると、一人一人が意見をよく出し、グループ毎の考えに違いがみられた。
- ・ 本校の生徒は知的障がいがあるため、教師による一方的な働きかけでは集中力が続かないことが多い。しかし、ペアワークを取り入れ、互いに確認し合う状況を設定することで集中できる時間が増え、学習活動の内容理解も促進された。

「アクティブ・ラーニング」に取り組む際の課題として「評価をすることが難しい」を挙げた回答者が3割を超えた(図4)。実践発表会においても、各開発校でのパフォーマンス評価やルーブリックに関する取組への参加者の関心が非常に高かった。育成したい資質・能力を多面的に評価するための手法の研究や、教員の評価能力を高めるための研修の工夫等が必要である。

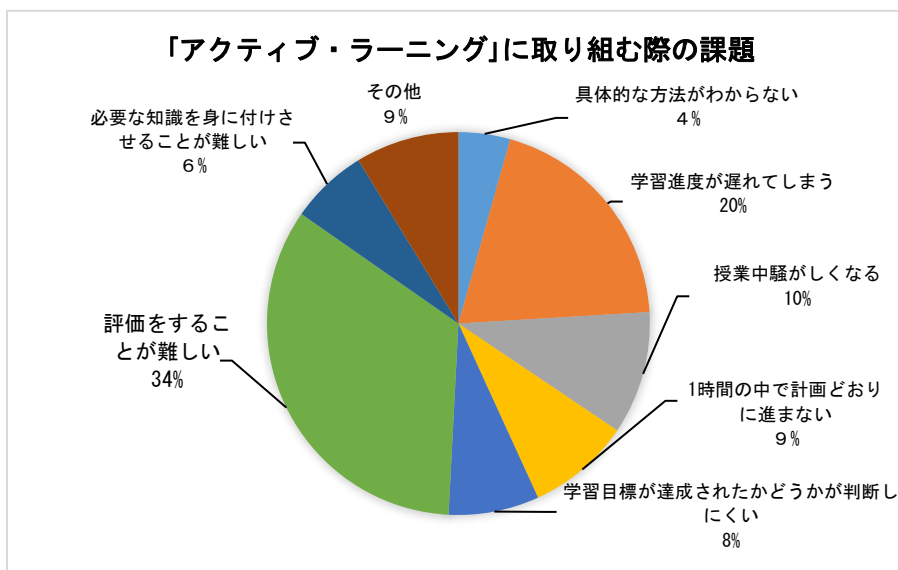


図 4

II 研究開発校におけるプロジェクト推進 ～プロジェクト担当者へのアンケート結果～

研究開発校 8 校のプロジェクト担当者を対象に、3（2）年間の校内でのプロジェクト推進について、平成 30 年 1～2 月に記述式のアンケートを実施した。以下は、そのまとめである。

1 校内での推進組織について

(1) プロジェクトのための組織の立ち上げ（位置付け）はどのように行われましたか。また、組織の中心メンバーとなったのは誰（役職）でしたか。

- 「各種委員会」という位置付けで、年度末に次年度のメンバーを決定しました。また、研修主任がプロジェクトリーダーを務めました。
- 「授業改善」の取組として、研修部を中心にプロジェクトメンバーを構成しました。当時、指定を受けていた ICT 活用事業、または初任者研究授業と連動させて、無理のない形でできるように配慮しながらの立ち上げでした。立ち上げ時の中心メンバーは研修部所属の家庭科主任の先生でした。
- 各教科より、1 名を選出してもらった。（中心メンバー）研修課長
- 校内の委員会の一つとして立ち上げられた。初年度の中心メンバーは教務主任。2 年目以降は、教務主任が異動したこともあり、1 年目に研究発表をした教諭が引き継いだ。
- 独立したプロジェクトを設けた。プロジェクトメンバーは教諭を擁する教科から各 1 名とした。メンバー選定は、各教科主任ではなく、ICT 活用のスキル等を考慮し、管理職の指導・助言を受けて指名した。プロジェクトリーダーは、平成 27、28 年度は研修課の課長が務め、平成 29 年度に専門に担当する分掌として研究開発課を立ち上げ、その課長が務めた（いずれの課長も指導教諭を充てた）。
- ・平成 27 年度の組織は、学校長の指示のもと立ち上げられました。1 年目は数学科中心の取組であり、メンバーの中心となったのは、図書研修主任（数学科教員）です。ただし、年度途中で、AL 型授業推進プロジェクトチーム（各教科から代表選出）を立ち上げ、研究・情報交換をしました。
・平成 28 年度は、前年度途中で立ち上げた AL 型授業推進プロジェクトチーム（各教科から代表選出）を母体とし、以下のメンバーで構成しました。
* 教務主任（総括）、図書研修主任（リーダー）、各教科の代表（9 名）、学年主任（1、2 年）
- 平成 27 年度の年度当初、校内組織にアクティブ・ラーニングプロジェクトが位置付けられ、研修主任がプロジェクトリーダーに指名された。その後管理職と検討し、当時の新規採用教員 3 名を含めた 5 名のメンバーから

なるプロジェクトチームを立ち上げた。

- 研修主任（主幹教諭）を中心として、各教科主任を組織に組み込んだことで、職員全員に連絡・指示が渡るようにした。

(2) 推進のための時間（会議、打合せ等）はどのように確保しましたか。

- プロジェクトメンバー全員での打ち合わせは7月と10月に各1回、行いました。研究授業の担当者会議は7月と10月に各3回、行いました。
- あらかじめ時間を設定しておく、担当教員の負担感が増すという思いから、打合せ等は必要に応じてその都度行って行きました。ただし、研究授業や職員研修会等の大きな行事の前は、運営委員会や職員会議等で時間をいただきました。
- 「新たな学びプロジェクト」推進委員会会議を不定期に放課後に実施した。
 - ・ 案件ごとに随時関係担当（2、3名）で打ち合わせを行った。
- 定期的な会議の時間は取れなかった。必要に応じて、考査前・考査中などの部活動がない期間の放課後に行った。
- 初年度は担当者会議を時間割に一コマ設定した。時間割上の制約が大きいため、2年目からは時間割調整で会議時間を確保した。その他、必要最小限での少人数の会議の開催、資料の回覧などで対応した。
- 推進計画・実施内容や公開研究授業、校内実践報告会など、全職員へ関わるものは、職員会議や職員研修会を活用し、周知を図りました。「新たな学びプロジェクト」会議は、放課後実施しました。時間が取れない時は、各教科の実践状況を取りまとめたものを回覧し、職員間で情報の共有を図りました。
- 定期的な会議の時間はあまり設定しなかったが、職員室での雑談の中で意見交換を多く行った。
- 年度初めに、各教科に対して授業方針等の取組案を提出させた。定期的な会議等の時間を確保することはできなかったが、連絡等は教科主任を通じて行った。

2 プロジェクトの推進過程について

(1) 推進計画は、誰が、どのように作成しましたか。

- プロジェクトリーダーが、研究推進会議で示された内容に基づいて作成しました。
- 県から出された年間のスケジュールをもとに、プロジェクトリーダーが計画案を打ち出し、プロジェクト推進委員会での討議を経て作成し、職員に周知するという流れでした。
- 主に研修課長が作成したが、プロジェクト委員会のメンバーの合議により決定した。

- 中心メンバーの教諭が作成し、教務主任に提案した。
- ・推進計画はプロジェクトリーダーが原案を作成し校内で検討した。
 - ・既存の取組（他校視察、研究授業、相互授業参観、授業アンケートなど）を実施月に合わせて計画の中に入れ、年間を通じて関連する取組が継続的に実施できるようにした。
 - ・大学と連携・協力した共同研究も計画に取り込んだ。
- ・リーダーを中心に推進計画を作成しました。特に、2年目は、全教科に広げる取組だったので、年度当初から計画していた授業参観週間（全教員が1回授業参観をし、感想を提出）を研究授業週間と名前を変え、6月と10月で、各教科にAL型研究授業を実践してもらいました。研究授業実践者は、その前後1ヶ月でアンケートを行い、生徒の変容・成果と課題をまとめてもらいました。最後に、11月の校内実践報告会で発表してもらい、全職員で、情報共有できるようにいたしました。
 - ・「社会性と情動の学習（SEL－8S）」に関しては、1年で3回、HR、総学で実施しました。学校や学年の行事に合わせて計画し、実施しました。
- 管理職とプロジェクトチームで原案を作り、アドバイザーである大学教授にご意見を頂きながら計画を固めていった。
- 研修主任が計画案を作成し、管理職・アドバイザーの先生と微調整を行った。推進計画を作成する際は、4月最初に県の工程表ガイドライン（研究開発要項）を参考にした。

(2) 推進過程で特に苦勞したことは何ですか。また、それをどのように克服しましたか。

- 課題の設定と、その対応方法の決定に苦勞しました。分掌（研修班）の取組として対応できたので、多くの先生方からご協力いただきました。
- 苦勞したことは、職員へ授業改善の必要性を理解していただき、その取組を普及させることです。特に1年目は、“一部の人が頑張っている実験的な取組“という認識を持つ先生方が多く、協力体制も不十分だったため、プロジェクトメンバーの負担が大きくなってしまっていました。しかし、研修会等を経て、学校全体の評価方法の変更も行われ、授業改善の必要性が全体で共有されたことから、多くの先生が関わりを持って取組に協力し、AL型授業を取り入れるようになっていきます。
- ・校内の全職員への趣旨説明および情報の共有の徹底
 - ・諸会議のための時間の確保
 - ・職員研修会や各教科会議等を利用して克服
- 推進計画や報告書等、通常の業務やHR、授業準備と並行して作成するのは苦勞した。ゆっくり立ち止まって考える余裕が最後まで持てなかった。
- AL型授業とは何かの試行錯誤。書籍を読んだり研修に参加したりしな

がら、少しずつ改善を重ねた。特に、全国の先生方の授業に関する情報には常にアンテナを立てた。そして学校訪問を実施し、先生方と直接話をすることを通して、自分たちでは気付くことのできなかつた多くのヒントを得ることができた。

- ・取組の初期では、アクティブ・ラーニングの認知度が十分でなく、推進する側も教員も導入のための手がかりが得られなかつた。

- *まずアクティブ・ラーニング、ICT活用をテーマとした外部講師による職員研修を実施した。

- *プロジェクトチームでは、外部講師も登用して、授業手法研究やICT活用に関する小規模な勉強会を行った。

- *基本研修に伴う研究授業へアクティブ・ラーニングを積極的に導入してもらおうよう要請した。

- *所属教科の授業参観を通して認知が進み、その他の教員の授業設計に導入された。

- ・ICTを活用した取組を想定していたが、ネットワーク環境整備や情報端末、学習管理システム導入などで導入経費を含めて克服すべき様々な課題があつた。

- *福岡県の協力を得て、ネットワークや学習管理システムの利用環境を構築した。

- *情報機器の技術進歩が速く、耐用年数も短いため、機器選定が難しかった。

- *福岡県からの整備補助や民間助成金を申請して整備した。

- ・平成27年度は、支援を受けている内容（SEL-8SとUDL）とAL型授業の研究授業を実践し、報告しました。最初は手探り状態だったので、何をどのようにしたらいいのか苦労しました。様々なAL型授業先進校の視察を行い、参考にいたしました。

- ・平成28年度は、全教科に広げる時に、基本的なAL型授業を最初の職員研修会で紹介し、各教科で試行錯誤しながら、協議し、AL型研究授業を実践していきました。そして、校内実践報告会で発表し、全職員で共有しました。特に、授業担当者、発表者を決定する際、新たな事に挑戦しなければならないといった誤解を生み、調整に苦労しました。しかし、1年目にリーダーが率先して実践したことと、2年目は全教科に広げることを当初から決めていたこと、AL型授業推進プロジェクトチーム（「新たな学びプロジェクト」メンバーとは別の実践推進メンバー）を作って協議していたことがあって、比較的、スムーズに進んだと感じました。

- ・平成29年度は、今までの反省を踏まえての実践する際、管理職からのアドバイスを受けながら、更に深い研究にしたこと。

- アドバイザーの先生との日程を合わせることに一番苦労した。年度初め

に直接大学の教授室まで出向き、本校の予定とのすり合わせを行った。職員研修もまとまった時間がなかなか取れず、ALの概要は研修できたが、評価（法）などは十分な理解には至っていない。アドバイザーの先生から推薦図書を紹介していただき、それらを職員室に置いて貸し出す形にして、職員個人の研修に役立ててもらった。

(3) プロジェクトが軌道に乗ってきたと感じたのはいつ頃ですか。また、そう感じた理由は何ですか。

- 今年度の2学期後半からと感じています。理由は、評価とカリキュラムの改善に学校全体で取り組み始めた時期だからです。
- 2年目以降、授業改善の必要性を感じてくださった先生方が増えた頃からです。評価方法の変更により、生徒が意欲的に取り組む授業づくりと合わせてルーブリック等がより多くの授業で活用されるようになり、本校ならではのALが形づくられたと感じるようになりました。
- ALへの取組は、比較的早い段階から（H28秋～）軌道に乗っていたと感じる。ICT機器が完備され（県のICT活用教育研究指定校）、職員も機械操作に慣れており、ICTを活用したALへの移行はスムーズだったと思われる。また、本校は中高一貫校なので生徒同士の仲もよく、グループワークへの抵抗も少なかったのも大きな要因である。
- （時期） 昨年3学期頃
（理由） 校内研修会で活発な討議が行われ、積極的な意見や案が出されたから。ホワイトボードや電子黒板などの貸し出しが頻繁に行われるようになったから。日常的な授業でグループ活動が頻繁に行われるようになったから。
- 2年目の終わり頃、気がつくとも多くの先生がなんらかの形で授業スタイルの工夫をされていた。ALに否定的な人もまだいるとは思いますが、かといって新しい学びの形を模索していない人はいない。
- 2年目の10月のAL型授業を用いた公開研究授業を実践し、全教科に校内実践報告会で発表してもらった時です。広がりを感じたからです。
- 2年目の秋以降。特に実践発表会後の反響が大きく、他校や民間企業からの学校訪問が増加した。また、本校においてAL型授業に挑戦しようとするプロジェクトチーム以外の先生が増えたことも大きな理由である。
- 取組に対する職員の理解があり、開始半年後には、認知が深まるなどの成果が得られた。そのため、取組初年度からプロジェクトが軌道に乗っている感じがあった。取りかかりこそ難儀したが、すべてが新しい取組ではなく、従来の授業改善、授業力向上の取組を基本とするため、方向性を示すだけで職員が取り組めるものとなっていたことが大きい。

(4) プロジェクト推進の原動力・助けとなったものは何ですか。

(例：教員のコミュニケーション、大学のアドバイザーからの助言、等)

- アクティブ・ラーニングに積極的に取り組もうとする先生方や、取組をバックアップして下さった管理職の先生方や主任主事の先生方、大学の先生のサポートのおかげと思います。
- 一つは、規律ある授業ができていたこと（自由に発言したり、他人と話し合ったりする活動の素地が既にあったこと）です。もう一つは、外部からの刺激が多くあったことです。大学の先生からのご指導はもちろん、他校の先生の実践をうかがったり、企業で実施されているALを体験できる機会に恵まれました。先進的な授業改善の取組を知り得ることで、先生方のやる気を引き出したり、危機感を共有できたりということにつながったと思います。
- ICT機器完備が非常に大きな役割を占めた。また、若い層の職員がICTの学習アプリ、ソフトを駆使した授業を積極的に行ってくれたことが、全体への広がりをもたらし、促進したと考えられる。
- ・大学のアドバイザーからの助言(比較的容易に日常的な授業に導入可能な指導法等について具体例を示していただいた)。
 - ・教員のコミュニケーションにより実践例をお互いに共有でき、各自の授業に取り入れた。
- 他校の推進責任者とのつながり。生徒の楽しそうに学ぶ姿。
- ・年度始めの大学教授からの支援内容の研修会
 - ・年度始めのセンターからのアクティブ・ラーニング研修会(職員研修会)
 - ・校内の職員研修会
 - ・全教員の協力
- ・新しいことに挑戦しようとする若い教員の姿
 - ・アドバイザーの先生方からの助言やお褒めの言葉
 - ・全国の先生方との熱い思いの共有
 - ・本校生徒の学ぶ姿の変化
- プロジェクト推進に対する管理職のリーダーシップと、もともと醸成されていた教員同士の良好な関係がプロジェクト推進の大きな原動力・助けとなった。特に研究授業を含む授業実践に対するプロジェクトチームのメンバーの積極的姿勢が、その他の教員に好影響を及ぼした。また、関わってくださった大学アドバイザー、大学関係職員の方々のバイタリティーあふれる姿に新鮮な刺激を受けた。

3 職員研修について

(1) プロジェクト推進のために効果的だった職員研修は何ですか。

- 大学の先生にいただいた研修が一番、効果的だったと思います。
- 大学の先生の研修（AL全般だけでなく高大接続改革やルーブリック作成についても話していただきました）や他校の先生方を招いての研修（評価法や授業でのAL導入について）は大変参考になったと思っています。そして、研修自体もAL方式でやると効果が高いのではと感じています。
- アドバイザーの先生からのALに関する基礎講座・演習。また、校内・校外（公開）研究授業の参加や、校外のALに関する講座（講演会）研修参加。
- ・大学のアドバイザーによる分かりやすい講義
 - ・教員同士による討議を取り入れた研修会
- 校内の教員の実践例を聞くこと。
- ・福岡県教育センターのアクティブ・ラーニング研修会
 - ・大学教授からの支援内容の研修会
 - ・基本的AL研修会
 - ・全教科による校内実践報告会
 - ・模擬授業を実践し、ワークショップ形式で協議
- ・AL校内発表会（実践発表会の内容を校内で発表）
 - ・授業改善に向けたグループワーク（教科ごとにグループをつくり、本校の生徒に身に付けさせたい力とは何か、そしてそのために授業で工夫できることは何か等についてALの視点から話し合い、共有する機会を設けた。）
 - ・知識構成型ジグソー法の授業体験（大学の先生による）
- 「アクティブ・ラーニング型授業の進め方について」と題した初年度最初の研修が、「アクティブ・ラーニングとは何か、ICTを活用した次世代型教育とは何か」について整理するのに役立った。この研修によって、特にICT機器の活用に対する教員の理解が深まり、以降のICT環境の充実とICT機器の利用頻度の向上、授業設計に大きく影響したと思われる。

(2) 授業参観や公開授業について、効果的だった取組は何ですか。

- 7月と10月に実施した公開授業が最も効果的でした。全教科で実施することで、これまでの取組を広げることができました。
- 教員による授業参観を最低年4回行った上で、その際必ず意見を書いたメモを渡した。研究授業後の教科反省会で、単なる批評にとどまらず、授業の中でアクティブ・ラーニングがどのように取り扱われていたか具体的に討議した。
- 特に大きな影響、効果を感じたのは、基本研修での研究授業だった。基本研修に伴う研究授業の授業デザインが教員全体、各教科への具体的例と

して機能した。また公開授業では、経験年数等を問わず授業者を指定したため、比較的関心が薄い教員であっても新たな学びの授業デザインとその実践に関わることができた。2年目の公開授業では、公開授業を2時間設けたことで参観する側に教科を超えて新たな学びを伝える好機となった。

- ・1、2年生の全クラスでAL型授業をお願いした公開授業（5、6限）は多くの教員を巻き込むことができ、非常に効果的であった。
 - ・初任者にプロジェクトチームに入ってもらうことで、「初任研研究授業」＝「AL研究授業」という構図が出来上がり、他の先生方にALについて考えてもらうよい機会を作ることができた。
- ・特定の教科、職員の負担にならないよう、公開授業では、その時間の全クラスを公開としたこと。また、その後の各教科協議会で、他校の先生を交えた情報交換ができたことが効果的だった。
- ・本年度、実施した教科別の分科会形式の研究協議です。昨年度までの公開研究授業では全体会での協議のみで、内容としては主に本校全体のALについて取り上げられました。本年度は分科会を実施することで、各教科でのALや授業改善の取組について参観の先生方と話し合う形となりましたので、参観者だけでなく本校の研究授業を担当した教員にとっても、深い学びを得る機会となったと思います。
- ・公開授業の後に、他校の授業参観者と授業を受けた生徒を交えた授業検討会を行ったこと。
- ・研究授業週間における授業参観のシートに、①「授業のねらい」②「ねらいを達成するための手立て」③「手立てが適切か」④その他（AL、UDL、生徒指導上の観点などの感想）を入れ、参観者の授業改善も意識させたこと。
 - ・公開授業で、高校の先生のみならず、地域の関係者、保護者、小・中学校の先生を招いて、5限目を自由参観（全授業でAL型授業）、6限目に4教科のAL型研究授業を実践する取組にしたこと。

4 プロジェクトの成果について

(1) 担当者として、特に達成感を感じた成果は何ですか。

- 全教科で公開授業を実施できたことと、評価とカリキュラムの改善に学校全体が取り組み始めたことが、今年度の成果であったと思います。
- 実践報告会を成功裏に終えたこと
- 本年度、全校生徒を対象として実施した「AL発表会」です。校内でのAL型学習の成果をテーマごとに生徒が順に発表しました。企業と連携した授業やAL系の活動も含め、成果を生徒たちが十分に発表してくれました。そして、その発表を受けて、1～3年生で学年を超えて構成された班で活発に協議を行えたことは、プロジェクトを通して行ってきた授業改善

の成果を感じるものでした。知識偏重ではない、実社会で活躍できる人材を育てる〇〇高校の教育活動に寄与できたと思います。

- 先進的内容を課題とする取組であったが、それを教員が好意的に捉え、組織的な協力が得られた。この取組が教員の組織力の強化・向上につながったと感じており、今後別の教育課題に取り組む場合においてもそれらが生かされると期待している。また課題であったICT環境の整備とその活用が飛躍的に進んだ。日進月歩の技術革新により5年、10年後に到来するであろう次世代型の教育環境にスムーズに移行できることは、大きな成果であると思う。
- ・主体的・対話的で深い学びをしようとする生徒たちの姿
・授業改善をしようとしている教員の姿
- 一部の職員に偏ることなく、程度の差はあれ、全員がALに取り組んでいること。また、職員・生徒対象に行ったALに関するアンケートで、数値の改善や伸長が見られたこと。そのコメント欄に、前向きな意見が多かったことに今後の期待が持てたこと。公開授業実施後に、他校から参加された先生方からもさまざまな意見を頂戴したが、自分たちのやってきたことに対して自信が持てたこと。また、本校の職員が大変忙しい中でも協力的であり、一定の成果を出してくれるなど、その力量の高さを知ることができたこと。
- 若手だけでなく、ベテランの先生でも授業スタイルを変えて新しい学びを追求している姿を見た時。その授業を生徒が楽しいと話しているのを聞いた時。
- ・生徒の意欲関心が高まり、主体的に活動し、協議・協力し、理解を深める場面が多くなったこと。
・教員が、AL型授業実践を意識することで、生徒の力をうまく引き出させるための教材研究と実践を試みるようになったこと。
・教員が生徒の主体性を意識することで、様々な工夫により授業に広がりが出てきたこと。

(2) プロジェクトの成果を地域や保護者にどのように発信していますか。

また、発信する予定ですか。

- 学校HPで掲載したり、中学校訪問の際に資料を配布したりしています。今後の新たな取組については未定です。
- ・学校のホームページおよび学校案内パンフレットで紹介している。
・中学校訪問時に説明している。
・中学生対象の体験入学等で説明している。
- ・プロジェクトの取組については、中学生、中学生の保護者、地域への学校説明会の話題として取り上げ、また学校のウェブページ、広報チラシ、

広報ポスターを使って発信している。

- ・保護者会、地域の健全育成に関する集会等で、(十分とは言えないが) A Lや I C Tについて伝えている。公開授業は保護者にも案内をしている。
- ・本校の広報誌でのアピール
 - ・中学生体験入学にて、「アクティブハイスクール〇〇高校体験授業」と称して、A L型授業の体験授業を実施(国数社理英)。また、学校紹介ビデオにてA L型授業について紹介
 - ・生徒による中学校訪問でのアピール
- ・学校通信の中に、「新たな学びプロジェクト」における授業風景を載せ、保護者・中学校・地域に発信しています。
- 中学校への説明会などで発信している。
- 全体の成果については、「A L通信」という形で発信しています。また、企業と連携したA L系の活動等については、P T A総会や文化祭等の保護者参加行事で生徒自ら活動の報告を行っています。その他、地域のラジオ番組での広報活動や店舗での広報・宣伝活動等を行いました。

(3) 29年度の実践発表会の感想をお書きください。

- 内容に満足していただけたか不安ではありますが、今、実践できていることをできる限りお伝えできたと思います。
- 学校の取組の実践発表と教科の実践発表の両方の準備をするのが、非常に大変だった。
- 回を重ねるごとに本校の独自色を打ち出せるようになったと思います。そのことが“〇〇高校(研究開発校)だから、そういうことができるのでは?”ではなく、“自分の学校だったら、どういうふうにできるのか”と参加者の方が考えていただけるような分科会になるよう心掛け、少しでもその思いが伝わったのでは、と感じています。
- 分科会参加者から、好意的な感想を得て安心した。他校の実践発表もある中、二コマ続けて参加していただいた方もいらっしゃって、恐縮している。発表の機会は、事前の準備を行うに当たって、取組を改めて見つめなおし、新たな課題を明らかにするためにも、有用な機会となった。また実践発表会では、参加者の反応、参加者の意見を直接聞くことができ、課題を明らかにするだけでなく、自校の取組に対する自信にもつながった。
- 27年度に比べ、参加される先生方のA Lに対する知識の深まり、経験値の高まりを肌で感じた。A Lの福岡県全体への広がりを非常に感じた実践発表会だった。
- 本校の分科会への参加者が少なく残念だった。
- 午前と午後の入れ替え制でなかったのが、丁寧に伝えることができた。
- ・管理職を始め、アドバイザーの大学教授や担当指導主事からの指導・助言

のもと、実践発表会では、本校の3年間の「新たな学びプロジェクト」の取組に加え、成果と課題を発表できた。

- ・模擬授業に参加された先生方に、本校の生徒の実態に合った「主体的・対話的で深い学び」の実践を紹介でき、理解を得られたことがよかった。

5 今後に向けて

(1) 来年度以降、「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」を推進するために取り組みたいことは何ですか。

- 「評価規準の活用と改良」「カリキュラムの改善」「ICT機器の整備と活用」の3点に取り組みたいと思います。
- ・総合的な学習の時間を使って、教科を越えたアクティブ・ラーニングに組みたい。
 - ・評価の在り方を更に研究したい。
- 評価法の改善と研究をさらに進めていきたいと思います。本校の進学希望生徒にとっては推薦入試が重要な手段です。これからは「多面的評価」が重視されてきますので、ALの授業改善とともに生徒の意欲をひきだし、多様な能力を測る評価について討議したり、外部講師による校内研修会を設けたりしたいです。
- ・これからも授業改善、授業力向上の校内プロジェクトとして継続し、取組をさらに深化させていきたい。
 - ・「主体的・対話的で深い学び」を推進するため、福岡県教育センターの協力を得た職員研修を実施したい。
 - ・現在実施しているキャリア教育等、小学校、中学校、大学との連携・協力を引き続き進めたい。
 - ・大学の協力を得て、学習支援システムの活用を通じた効率的、効果的な次世代型の学習改善、授業改善の取組を行いたい。
 - ・アクティブラーニング・スペクトラムのようなアプローチで授業手法を整理し、教員の利用の便を図りたい。
- 教科の授業だけでなく、教育活動全体で生徒がALの視点を持てるようにするためにはどのような方策があるのかを考えてみたい。
- まず何と言っても普段の「授業力」を向上させること。ICTやALはあくまでも授業の一部。そのためには、従来通り相互授業参観等を企画し、授業改善に努めたい。同時に、ALを実施した際の「評価」が課題なので今後の取組としたい。
- 学びの足跡を可視化すること。ポートフォリオを授業やキャリア教育に積極的に取り入れたい。
- 「主体的・対話的で深い学び」の「〇〇高校 ver.」をつくる。
 - *全ての生徒が、どの授業も安心して受けられるようにする

*生徒が「できる、分かる」授業をつくる

*どの授業を受けても、本校の授業と分かるような、統一感を持った授業デザインをつくる

(2) 「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」に組織的に取り組もうとする学校にメッセージをお願いします。

- 担当の先生が一人で抱え込まず、学校全体で取り組むことが大切だと思います。「ALの視点からの授業改善」が全ての先生方の課題である、という共通認識のもと、管理職の先生方や主任主事の先生方と連携して、取り組んでいただければと思います。
- 取り組みやすいところから、まずやってみることが大切です。
- ・(担当の先生方へ)
校内の中でのALへの温度差や考え方の違いは当然あると思います(温度差自体の解消は難しいところがあるのかもしれませんが)。その点を怖がらず、また焦らず、チームとして前向きに取り組むという姿勢で入れば、必ず賛同してくれる先生は増えていくと思います。
- ・(取り組まれる学校様へ)
大きくとも小さくとも、とりあえずはまず一步踏み出し、前進することが大事だという思いを組織全体で共有できれば、担当の先生方の心の負担は軽くなると思います。
- アクティブ・ラーニング型授業の導入を目指す取組は、これまでの授業手法、評価手法について、個人・組織として再評価する好機になります。学校が共通した目標に向かって取り組む活動のひとつとなり、学校文化の醸成にも好影響を与えるに違いありません。
- まずはこれまでの経験にとらわれることなく、色々な先生方(校内外問わず)との交流を増やし、気づきを得ながら幅広い視点を持つところから始めた方がよいと思います。また、授業改善は「スキル」だと思っています。従って、スキルを身に付ければ誰にでも授業改善は可能だと思っています。授業中の教員の活動をどう変えようかと考え過ぎるよりも、授業中の生徒の活動を変えるためにはどういう工夫をしたらよいただろうかという視点を持ち、知恵を絞れば、授業改善が円滑に進むかもしれません。
- 現在では個人レベルで実施されている場合がほとんどだと思われるので、研修組織を立ち上げ、年間行事に研修や公開授業を先に組込み、実施することが一番だと思う。また、ALに関する手法だけでもいくつもあるので、学校単位、教科単位でどの授業(法)を使用するのかなど、具体的に決め、研修を行う。決して数人だけの負担にならないようにすることが大切だと思う。

- 「アクティブ・ラーニング」を「しなければならないもの」と強制すると上手くいきません。特別なことをしないといけないわけでもありません。少し考え方を変えてみる、できるところからやってみる、やってみたい人から始めてみる、そういう肩の力を抜いた形で始めるといいと思います。否定的な人がいても、楽しく授業する姿や生徒が生き生きしている姿を見れば、いつかちょっと試してくれるようになります。北風ではなく太陽で広めていく無理のないALで、授業者・推進者が何より楽しむこと。教師自身がアクティブ・ラーナーになること。生徒を信じて任せてみることに。きっとそれは私たち教育者の可能性を信じることでもあります。難しく考えずに気軽に試してみてください。
- プロジェクトの立ち上げ時は、関係する先生と全教科からメンバーを選出し校長に任命していただく。
 - ・ 研修課とタイアップして職員研修会を活用し、1年間を通しての取組（①「主体的・対話的で深い学び」の基本研修・教科で協議 ②研究授業 ③校内実践報告会）を決めていく。
 - ・ 各教科で協議する時、「①生徒の実態把握②求める生徒像③そのための手立て」を考え実践する。
 - ・ 実践するにあたっては、「授業のねらい」をしぼり、研究授業の合評会では、「ねらい」に対する「手立て」の有効度を、根拠を持って数値化するとよい。